

「あったらいいプロジェクト」とは

あったらいいプロジェクトとは：ユーザー、ソフトメーカー、工具メーカーが三位一体となった生産性向上の取り組み。「海外製ハイパフォーマンスカッターを使いこなす」との思いが出发点。

ユーザー
事例報告

上手く使えたワケ

■まっさらから始めた

コダマコーポレーション(横浜市、小玉博幸社長)の加工技術研究所では、なぜオペレーターがエムゲの工具を使いこなせたのか。答えは、“先入観がなかったから”だ。

日本製工具とは設計思想が違う海外製工具を使いこなすには、日本製で培ったノウハウが障壁となりがちだ。その代表が“工具がびびったら送り速度を下げる”という先入観。

エムゲの工具だけでなく、他社工具を含め数多く試し、限界を見極め、適材適所で工具を使い分けている。

研究所は5軸加工機担当3人、複合加工機担当2人の計5人。5人中3人が加工未経験者だ。経験者の1人も「カタログ通り」と、平気で機械の最大性能まで使う初心者。工具についてもしかり。先入観なく取り組めたのがポイントといえる。

また、江口隆一係長はじめ皆が「加工の初心者でもやれたのは、TOPsolidシリーズだったから」と口をそろえる。これは、自社が扱う製品への絶対の信頼と、CAM支援の重要性を物語る。

■設備は良いものを

江口係長は「チタン合金の加工は、エムゲの“ティノックス”を使って生産性が4倍に」と話すが、目覚ましい成果にも、“この工具はここまでできる”という単なる事実の認識でしかない。

研究所は多軸・複合加工についての技術研究を担当している。加工機は6台。スイスのアジエ・シャルミー、ドイツのDMG、森精機など、世界的メーカーの機械が並ぶ。これだけの設備の理由は、小玉社長の「設備は中途半端ではなく、良いものを」との信念から。

ほとんどの機械がパレットチェンジャー付き。試作部からの難加工形状の仕事、24時間稼働の検証、被削材ごとの加工研究がメインだ。もちろん、TOPsolidシリーズを使い、CADによる部品や治具の設計、CAMによるパス出しも自分たちで手がけている。



研究所には豪華な加工機がずらり

※ご質問やご意見は、編集部・芳賀 (haga@news-pub.co.jp)まで